



繪入  
 浮世栄花一代男 上  
 一二合本

八達13  
 1886





13  
1886  
12

美女あをまこれ命を断ふ芥成と古人の言  
葉あり時恋れ山入りあやの連理の枝を  
まよふしきげ、鳥の枝毎れ別まを惜り、  
月の文りあはゆ水調の雉とも成花鳥  
風月れ中よれんあ、色ふそのくるあ、長生  
のせんごく仙家よりとせ乃流まを忘るぞゆ、  
されむ世思の塵しむさう野の恋種  
の中小恒あがら、あしらすの男れあま  
成、陰陽れ神の道ひうせ流ひ、俄小浮世

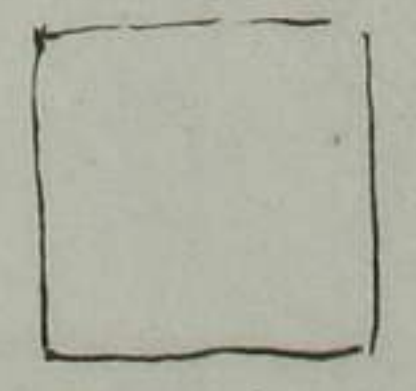


の景電拍信、是を見ふ人、唐実れぬた  
川あり、時より梅のふらふら、あはれ事、  
同、爰より玉殿乃手就志を、と樂み  
好

元禄六北と一の春

松葉軒

西鶴



浮世榮花一代男

花乃巻一

一 花笠は  
忍ひの腫

金龍山の土人  
羽柴の煙をうし  
日本堤の借乃目

三野の灯  
葉平乃定不

二 花ハ盛の  
男傾城

上野の梅狩  
高野信乃が龍  
奥勤の北芸次

妻の作り物  
ひとりの合紙



三

花きやまと

三人の子れ親

日痛の地底の腹立

野良小女実

内衣の縫とん

借巻友い毛織衣

毛費の姉いぎ

四

借小友

花おろし

先斗所乃又宿

花吹衣きか名

鳴糸乃呼息

思ひの外の昔に

編前明物共才

花笠ハ悲ひれ種



鏝を雀ふして富士をたぬぬと志うど、生前れ義花  
 一柄月夜露の悠樂、清貝女藤童乃たひふまはふ川の  
 外小何々菜むなしと、世くこれ賢き人の相お姉いぬ、さ  
 せども偏乞乃王むありありて整なる慰みぬれた、爰もむ  
 さし野の廣きかとりげ金龍山のほろりふ、毎り暮の四  
 阿登つくりて菊うけの窓のあけくれ、りりり王のふ立の  
 ほりはわにしてをき仕書一焼、土器の細工してけふと  
 たりまひふおろる男れ位あり、まふざし、鹽もなく流  
 る水ふひとく、舟の程もをぬ初老乃浪たる妻哉  
 さ姉、梅山の屋さく、若咲谷の見よげふ是東なき  
 凡情をもとく、野辺ちうき菜種れをのみ録め流



て校<sup>て</sup>比<sup>ぶ</sup>の音など、麦まらり節り夏くとあふぞり、紅葉  
き今年にえより雪き雨の姨と野夫のいふは在ふ人  
ハ津代の木のまこよりあて、家とそれなぶりと父母  
れ忍びあきまなく、昔とひとりときこの夜起し  
程ふたりぬ、あけがのそあおどろく音知千ぞ西若柴舟  
鳥の久いさふ、山雀ぶるといふを上调子にそりあげい川  
みかいらぬ君ちとせ松とくといふ、是を更あよりれのつら  
らに小あとりあふれ義別をそりぬ、浅草が京ふさこい  
そ阿そなうとそあそむをいふ人れならせもなく、  
船着れ為指とおげよぬかりえ、今ふあ女乃りこら  
ひ定まれふ樂しむもなく、なれまれば後の無の形ひも  
とくして無件そありおりかふ人とあつ、そりあれ人のね

る老女おろろぬ息絶て、相柴の野墓ふりよりなせ多  
地の人まてたげきを袖ふあゆ、髪月代をあつたぬ紙  
巻の紙表巾杖ぬ突つてそあれ道をおりぬ、彼の男と  
火宅の門役として待くそぬ着そふりたまさうなむい目立  
て、人より跡はなりて日本提あさうく水む呼継あな乃ゆ  
燈星乃連なるひより、相子木太鼓の音つまハ雲ふさこい  
鳴砂のいづく、はな来の名げきハ存根の芦乃友摺さいざ  
中周乃深宿ありて、比下を忠び乃具をそあうとあある  
ひハ長さ乃髪けて、恋の奴子とあもれ、武士ハ長氣あ  
て各別北山の子れぬきぬき、はきんともな水色、うかれ  
通ひの乃筋片くり声れ音むそ役の灯挑をるる跡より  
おせ、月夜の編笠もあなむわをわうからず、是塔きん



谷  
 やお山くとの志らげ、世の衣はおもをぬ人あがり記、いふ  
 身れりちのぬ野をくりたれもとしかくさハゲ一きハ  
 人のそちりともありぬぞ一と、後世あるの親意一と着ぬ  
 れの定めもなく、人のおみおつまきぬ衣紋板をおりて大の  
 けり、なりぬ、史屋の是あつめと老ばらく立腕のぞくきこて外  
 妻乃役人ふぬより人を焼雨ハ度くところ一に、四郎  
 と米大突ひ一とま滞分の甘き人を焼なとひとやあ  
 なる岡人といひ、まをぶなりは男れ任子世一まより十  
 下れたらゆり一に、一生多所見一ももなく介骨の死人  
 乃縁おひりれておもいた家外乃内よりぬをやいずれ時とぬ  
 里屋を是もぬ切して、是いと見ぬ一いぬふ子つくりたる  
 母の長煙管をくりて、お歌持たどいれ時一と聴き不どにいぬ  
 婿、お歌詠めていぬもりりいぬいぬいぬ







かたきぬ乃出籍ありふ、我なり子細をふくみて流る  
 るぬれ口もとはさなり、定家流のへれ字れごとく、まこ  
 ちのさく川一を好ふ人とあまきなるを、教条の凡人不調  
 さもあらばあれ、濡乃繩不投乃のつまうと加賀傳いすれ  
 て驟乃穿壁、名の本れうなり小惱ませ勤めを全振りハ  
 玉玉臂子人枕、朱唇万客小嘗させ、くまなり、控契  
 是ふとこれ一ぬふり、は男有頂天、夜こいまじ、惜扱と  
 眼せをーく見ぬぐりーに、夏を三浦志花紅糸ふ言尾む  
 らされば所の字いれ今れ太丈織ーを、くりや、おれ  
 中乃中義飛乃山更小動まて、おれ女良ハ禁乃松とハな  
 りぬ、そし、小見接て揚屋所、りゆきーに、いづまれ、石  
 小し大鳥美耀ーて理屈酒の遊眼、酔れはまされふか、海



けらも房の枕も色ぬらん、白ひ玉ある大抱若北中にう  
らひ—まきもやえりくんと人さうらぬと、かゝる観樂花露  
是をれりやふ躰山字のあそびもや成う—あ—ど、目も  
極樂志む—う程もんぞ—梅色碧りま、家屋—も西に  
老を初むるも—あとなつて、浅草寺も糸階も、杵く  
仁王十代推古天皇の御宇に建立の中なる、下土観音頭  
乐家初乃伽藍—て灵験無双此佛なり、此事寺も木  
の梅葉へこそまほし、舟も作りた、春ごとに尺—人立強さ  
は木陰もむ—男昔も平乃西氣を社り—このさうれ、是  
陰陽の神とて笑を好め人々好ら又おり、彼男  
は聲—ろも百日の大歌、家—とびさるる小海うす急道の  
葉花をささげけられ、誰をさ—て急れ相もいなる

共天ん—天はりくと、骨髄なげうりて歎ひけ—に成神と  
祈り後あらま難義乃あまう、お文物の淋—く松の丸舞  
なる時い—らま、抱竹も立せのひあ—こなる御告着中—お  
と急れぞりま、汝が力も急せよ私ひけひ難—、前生お  
—とゆんぞ—れ急る—に、成道もま—づける鐘なれぬ末  
のま—にとあ—ざり然もどもをのまぬ—くなげ—くといま  
—、是をさあ—い—るぞと金限珠玉をちりまを—花も立  
を—と—はひ、せのまもあ—ぬ葉花おとバ、耳も交  
目も足もよりれぬれ—みなり—と、御神徳をめてつものあ  
け不のとはなりぬ肝もあ—ど—何—か—く成道を被む  
思—外—も—ハ—足—えぬる—あ—りて、是なる世の事—宣—と  
嫉—く—隠—ま—登—れ—急—び—し—奴—と—我—と—名—を—あ—く—あ—ぬ—ら—ふ



り、恥ひのまゝといさめて諸を乃、恋はく〜をん事〜  
び、身み乃のににくく〜ととれれ〜なな也

花ハ盛乃男傾城

花ならも楊と成女なく、は、女と成、吾の諸人の詠めあ  
う、ぬ、こ、ゆ、な、ま、あ、れ、〜み、な、ま、こ、の、や、こ、な、ま、形、し、つ  
ぞ、と、月、乃、指、と、成、〜こ、ま、雲、の、恨、ひ、こ、い、不、立、か、さ、さ、の、今、つ  
な、ぬ、舟、と、ま、と、〜誰、ぬ、土、小、碇、を、お、ろ、す、〜、鬼、なる、あ  
れ、ぬ、ら、ぬ、む、う、〜れ、形、を、お、〜む、ま、さ、と、こ、を、あ、れ、〜こ、ま  
人の国、白、辰、島、と、四、十、六、乃、ま、ご、い、我、鏡、お、梅、〜、あ、洞、を  
流、〜、是、ち、と、甚、憂、を、雪、落、ふ、こ、ふ、い、ま、び、あ、け、こ、ま、ん、さ、り、紀、  
我、も、其、こ、〜、は、う、り、く、成、い、所、ま、こ、と、是、く、く、出、何、と、な、く、美  
れ、こ、と、〜、い、ま、と、な、つ、こ、ま、通、お、お、狭、入、〜、い、ま、と、の、秋、、甲、お、れ、、腫、黄、

乃、も、程、あ、げ、不、の、〜、別、と、秋、の、綿、も、足、多、り、い、な、つ、て、我、名  
は、あ、つ、さ、る、益、烈、あ、つ、さ、る、、身、い、り、〜、れ、益、を、り、ぬ、り、む、さ、〜、地、固  
の、〜、野、人、東、敷、山、の、喜、の、益、都、ふ、も、見、ぬ、衣、装、衣、帯、い、ふ  
〜、れ、ま、ぬ、け、山、と、ん、〜、と、是、昔、を、れ、〜、の家、乃、凡、福、  
ま、こ、て、面、氣、を、詠、め、け、ら、ふ、つ、〜、と、大、器、り、乃、是、形、と、な、り  
た、と、〜、も、是、が、と、れ、も、ふ、人、あ、〜、も、春、姿、を、〜、益、我、横、え  
〜、こ、い、ふ、事、〜、や、と、ま、ち、夜、の、女、房、ど、も、に、不、思、儀、あ、て、さ、す、と  
自、小、なる、〜、と、解、も、、甘、ぬ、、先、小、、氣、を、、か、〜、、こ、あ、ひ、と、り、、積、境、  
小、山、寺、〜、こ、〜、も、程、なく、谷、中、れ、晚、鐘、音、せ、り、〜、く、〜、小、あ、ち、  
是、ま、ご、と、松、お、あ、〜、〜、を、海、〜、樽、乃、も、ち、お、ん、を、飲、け、て、あ、そ  
び、ぬ、〜、ぬ、き、酒、田、〜、里、河、前、れ、是、木、の、榻、あ、よ、と、流、白、乃、志  
〜、〜、う、と、お、〜、い、ま、い、ま、車、坂、を、靜、お、り、〜、さ、あ、〜、又、を、は、く、〜



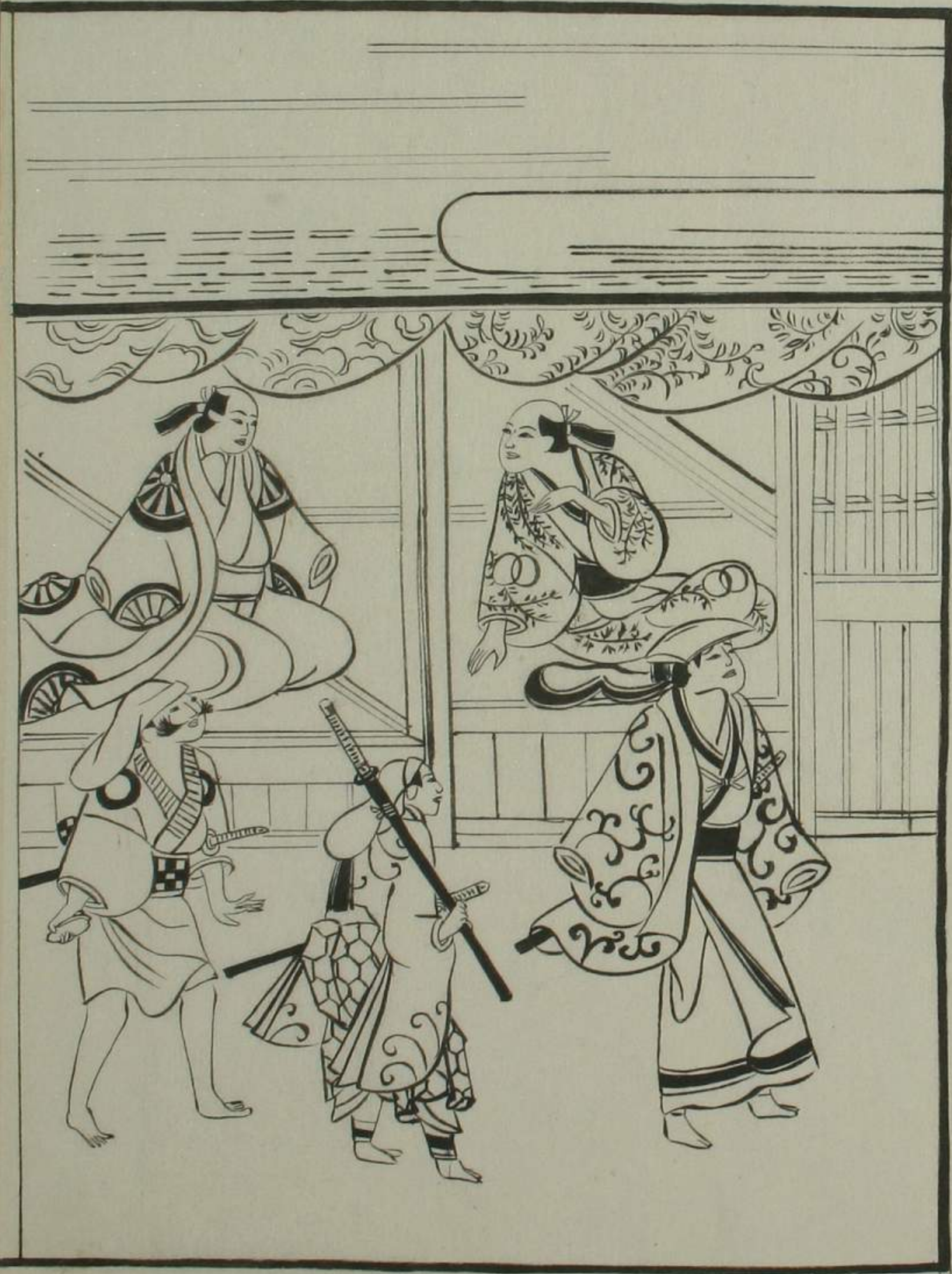
いふ中かゝる勲いふ門が後くお先へ架蛇の長柄あざかから城の  
玉座くまへ一対乃按察つてきて手振乃さぬらひ花衣  
よきくまへ一き女二人増花保よ志しり柳の枝ふ花かゝる  
鞠むとあぐ一因一もやう丸神裾言り抱首えはり  
ぬくくはらち懐よぬり刀を隠し一さ一、一妻女れ是を  
揃へてはる籠ゆへにつき一ハレさびり、所伏奉おを  
一てき一跡ふハニ十年もくま世を盗くよ系親仁くら  
ハ不測のちぬめしせ、花をむく一よ梅干れ赤み湯なり鳥  
つと一と孝道よあむ馬に系武士の役目とて大小指な  
ぐり子首お殊敷をくけてその建敷さ御前よぬのおこ  
りにそあはし一男よと怪おれり一は柳かゝる勲中  
ぬ恋ゆり一おの一かうちゆり一さゆくよ、大名お路くと

是へ一大空飛の裏れ門ふ入一は殿の奥よぬハあはれ  
御湯若さぬと、同一座あふひとくまへありて言壇二重よ  
思ひ返一れさびりくつまり一乃妻ふ二の門より奥  
へき男入座くくすその掬、お神よ長廊下まで御かゝ  
お勲と女六人くち込て、出させ給ふ柳よそふひあや一あまり  
と見一させぬひ一おおぐ一ハ髪かゝるて玉川ふお路を程  
さらせらま、そ風情三つうまの浅草の柳お袖うちうけ  
のぬつま枝いん髪ざりり一たるおそむつひ乃小女、衣ひどり  
より持席おきお一は柳まこびお君とい各おの内身振ひ  
ろざ一きさえやりらふお局をまづめ女着連、お次ま  
て飛ぶがまて御挨拶乃がと枝見えありせまふ、かしよりつ不  
ぬは伝せりはるまありて花を咲ど、ハふれ詠めとあ



天子御一むる事所一我目お家家よ、まれば何の乳  
ひもおおハなるを、大殿御死去乃後臨終つよき方を  
もあらをす、一あねもひやま、上氣あそむ、こつ讀せ  
つ、俄お何をさうお母、ゆ、せられらるごとく思ひな、おの  
く、所をといふ鳥つき、一、い、まもあづま、お、お、  
局多ん里もなく、は、男は誰をうまか、せの、よ、ぞ、御目  
通、且れ女中、一、は、内御の事、何お、一、とら、ま、ま  
ト、おとの折、云、残、を、う、せ、り、れ、は、是、も、い、て、子、細、な、一、御、茶  
花、あ、そ、む、さ、れ、れ、が、一、外、さ、後、ま、と、ま、ま、一、ま、あ、ら、り、な、り、  
人、れ、あ、る、べ、き、事、一、な、あ、一、既、以、先、後、の、思、ひ、お、お、な、い、し、  
し、と、一、恐、お、を、進、む、る、云、あ、れ、下、より、お、お、つ、あ、一、お、  
一、男、傾、城、町、を、え、せ、も、せ、作、せ、ま、ふ、そ、れ、一、そ、や、す、記、御、座







みぢれとひそくふや荒して、梅の園生を来ふ小玉所と三  
日かうちの梅一重ぬ、さとあはれむは昔をいそげといふ意  
ほふ妙栴子よ限燭乃ひくりつがぬぬぬのれふまんと  
うらゐり一紀名のひ男れ辰盛なる成二十余人さうゆきそ  
り豆粒也茶筌よ金の平聲をうけさせ、をくらめさせ  
に紅さう一芽の白粉をふどりて、ひぢりめん乃内衣若と  
けなく太丈深の仕着一極原の常まふむすませ、三層ふ  
ま垂れして細目まな一三味お名の弱うけて、こころとれ  
もひ入むり、あはれ又双云をうけとぬ、みかくもおや  
りて只よつと一形氣をうり、ゆるゆる女ふ散髪と、さふり  
ら田方といおもはまげ、さうりとあうつと御座みと笑ふら  
よとふくゆり、まな名もやらうふ太丈ちまき、自是節乃り



通つてと云ふは、米女石近と云ふ字内と云ふは、  
手末くハ鹿と云ふ中、鹿の三條と云ふと云ふは、  
取女れあつけなきをつけま、取女れすなき事、  
物りひまをせし成り、中申く、は伊豫石と云ふ大石、  
して長孫織と云ふと云ふは、米女と云ふ、  
傍松と云ふ名をよびてまつり、米女ハ女孫取の八橋  
おの、伊豫の石水たまつく熊谷の中、笠まつて馬の田、  
かふ、いづともはぐれよ立派をいつけたをこ成中、  
名をすておと、今いふと云ふは、大石と云ふおて  
き定まりうぬと云ふと云ふおと云ふ、あの米女を  
大まゆ、その位遠ひなるべ、いふ、こも自鼻がこふりと計

右まつ見立らる、若むらくさ、いづかあ、  
とすめ、つ不ぬ才見も、  
園とけと云ふ入札も、  
此方よえあ、  
後、ふぬぐひ小社、  
女あまりて衣、  
男を忘らせ、  
通へど不、  
うなる因、  
らあふ、  
乃明を、  
に、彼男



合く海ももぬら事もなすむこそ、大長又そち洞を流し、  
い川となくおもやせてありひとなきふお味丸のぬせら思か  
いもーくー死果皆埋まるといなりぬ、ぬとこいぬの我又と  
まがり乃恋の使より、命をーなりぬえ子を果不花と  
これのくこふのぐりぬ

花いぬれど三人の子の親

柳ハ見どり花代を極めておの勤め登の舞をなみふ  
う粗言かまのて園い漱越のくつも橋、情をけー神の  
浪瀧の仕組をさるる中のおもひ入、をーまり大敵のおとま  
四束通りなる深衣の后れ家の不とる返すくつてバ、津れ  
るも忘れ佛のるハな銭のりもけわーてりも地蔵と  
あきれさせぬひ流中、敵万の女、まあふ役者れ面影と

穴のぬ程見らあて、目を病出ーて我をぬのむともいふ  
ひれ新車<sup>てんぼ</sup>とばまー、<sup>龍</sup>草師まとは内院を流しを  
ー佛中同いぬぐひたれバと、立すく三にあらつてうらみぬ  
へども、後常あふ鹿よまをせ、俄り足どりもやくな  
つて蹴くー小毒までぬくぬて、今まあーと足ふ程まで  
入えよまき久仙が雲か、うろて腰をぬせーいよーつとあ  
はある、ー、系そごうれ女ふどいづうなるハ又、  
是をおもふおのまきぬーやにまーのり恋をーぬのこち  
まとーハ芝長の手ことまこといんちーま氣おぬり  
ぬすき世の中、いづま人れ埋子おハ見せま、いこつ  
ふも物難ー、ぬうせま、又ことりまなりて折云、お寺にぬけ  
道のまきい、癒あそぶ事、精進食何うめづらー、



かみあはれ—みありそふもいれぬ、兎角に花笠被  
ぎて思ふ奴が足ゆいせむ、柳を鞠揚さくらり、椀茶茶障の  
衣装のなまなりお、いづまの風情見こといせら—死ななり  
き、男の東なぐ—恋れ山のまかせめて思ふことにつぐくと  
あはれ、女をいふまでもな—能く極めて白似ら—死姿を  
つのお足がうき、思とおもふ、京の男の隆木杖突まで世  
に位跡もふ思ふなり、まきのふいそをを親—舟屋屋客  
も新山—ゆきこさうふきお、波をさす、多くちいお死  
の傍大—の四百の病の介を—乃もおは連も叶いぬ恋  
れさこ、ありれおかな—く近所なうぬ人をを思ひてふ  
ハ藝子と見ふ子、是より氣をうけ、いととねまひあふ、  
ふちや、なな門のあハ平雲、川お平雲、津子、お園と名いふ

女の風流たれすがたのま、め、お、舞妓といふ、面影ゆりて、お、  
太史の女、れすなる、美形より、ハ、お、通、嫌、ひの、目、く、と  
是、ハ、捨、難、し、木、戸、の、志、の、び、入、ら、み、ろ、ろ、お、居、を、こ、の、み、女  
様、あ、の、そ、う、次、明、し、を、き、ひ、あ、ぐ、り、て、ゆ、ら、り、そ、ひ、ぢ、ま、ん、ぢ、  
て、樂、し、み、し、ま、い、編、む、衣、の、う、ち、ハ、見、る、人、と、志、の、ま、う、ろ、  
隣、の、女、中、と、姿、を、や、り、上、と、若、ぬ、ぎ、て、着、仕、替、を、脱、  
む、娘、あ、け、の、娘、な、り、縁、お、れ、志、願、し、お、ハ、白、茶、を、お、う、り  
死、志、ろ、い、ん、ぞ、の、内、具、ゆ、い、ふ、ま、は、こ、お、れ、こ、い、は、あ、お、  
お、は、せ、之、指、若、若、尻、ら、死、形、を、お、系、お、も、ぬ、ま、せ、勝、と、お、も、お、  
を、い、い、く、ハ、た、く、な、嫌、し、こ、う、に、縁、あ、も、こ、を、た、る、お、撮、し、縁、風、情  
多、く、い、ぬ、こ、と、な、く、こ、と、ん、の、通、ふ、あ、り、女、れ、ぞ、う、り、は、女、の、中  
れ、男、の、男、乃、上、お、び、ん、お、お、い、れ、は、お、か、く、と、い、ち、ち、て、男、乃、か



たへ鏡を居郷と丹後と念を入て定めて横睡とそめてあはべ  
中、かひこかまのぬるなぐり、追身繪草紙、みなるべき女房お  
そろーく、女のみゆ〜、あつと思ふうち、午がぬ〜なる中  
居女れも、是るまで、爰もせぬまふ志を〜、ハ明後夜、ままと、  
夜更花重をあげけり、あゝぬのくろき、龍と鯉をかく〜、  
けあ〜と、東花と爰ふひらき、鶴と雀がこれ切形、まや〜、  
ゑて、氣わの〜ぬど、れい、や〜、あし、先い、あのみ、は内、あを  
〜、し、湯一羽を、あき、ら〜、り、〜、後、女中〜、と、九時  
は、毎と、髪切す、〜、い、なる、人の、小盃、と、清られ〜、お露、程も  
な〜、り、ぬ、う、な、ひ、の、ト、女、が、仕、業、を、く、ど、く、あ、り、ぬ、き、日、中、園  
の、神、く、別、して、松、の、尾、の、大、形、神、を、せ、い、まん、よ、入、酒、を、お、  
吟、味、を、つ、〜、宇、治、川、の、花、橋、を、ぬ、〜、つ、お、話、を、い、は、し、偽、し、

〜、ち、り、あ、り、と、あ、り、と、陽、逆、小、え、あ、と、〜、庭、を、え、り、〜、を、お、り、  
〜、れ、〜、を、れ、〜、り、健、き、ね、と、〜、と、重、役、者、ハ、ゆ、ら、げ、お、り、中、〜、お、  
お、娘、と、ぬ、ふ、成、る、若、衆、凡、そ、の、彼、女、眼、が、〜、替、り、て、怪、業、の、あ、り  
〜、さ、ぬ、あ、い、は、ま、な、づ、〜、い、ぬ、や、と、ま、若、衆、が、い、を、〜、り、〜、一、ん、〜、お、  
振、神、と、ま、〜、と、橋、を、ち、め、所、分、〜、の、あ、け、〜、と、〜、と、三、十、七、八、の、  
内、を、あ、〜、り、〜、日、刺、の、髪、の、あ、と、青、是、入、け、〜、と、〜、り、ま、い、  
是、お、い、品、法、大、師、も、怒、み、か、ぬ、屋、〜、い、う、小、信、守、の、む、〜、を、  
若、ら、ぬ、む、と、〜、あ、り、な、ぬ、男、目、と、舞、臺、を、あ、志、ひ、あ、〜、と、  
後、ふ、ぬ、り、り、ハ、女、が、〜、い、が、口、を、す、ぼ、め、を、我、〜、と、い、ま、〜、の、若、の  
女、れ、事、が、れ、む、と、〜、せ、り、ぬ、の、耐、不、〜、げ、と、か、り、出、院、毛、髪、を、  
落、せ、む、見、物、是、い、と、大、笑、志、を、〜、〜、あ、〜、事、〜、あ、〜、一、〜、  
と、い、ま、〜、と、あ、〜、か、こ、の、お、り、〜、肝、を、つ、ぬ、〜、一、〜、樂、屋、突



塔  
叔母合めいよれ子とほたせし時、子細ら—きいぬおころう  
しけりいぬ—とおおりの程があるなり、は又大又ぬれ勤  
めとい十二年も通物や務もせくとはいひおがう、天  
是をとらぬ為子まどく故とそそめ—はぬ、されど  
は又又の年せんさく指—お母の宿をせし成事、京  
教の廣きぬめ—といはうちふ、遊書—ちち立て清人  
海—海をへ、木戸お名のび子お侍清て着流をのせし  
ひぐ—山乃くこいもいぬ、是もあひぬる大長いいうち老  
僧れ、慰しなぬうそゆ—とあと改名なひ切ふ、是崎の下  
あら—も門お入言周よりハ通らぬ—て猿戸明て柱込  
をぬくふすぎそし、岩徳北陰より是もあけを—わいれ  
を供の人い跡中かへりぬ、大産おをまためて月えぬあ







めに志のらひ一菊うけれ申二階みあがぬ君も成り臨む登  
るおがぐそこふけて見一ふ大志んきなくて座敷の床  
及具ぞうりえ祝して物狂のうほに物のはりゆき  
茶ただこの通ひも風変替りてこなるを此あは女ぞうり  
おらふ、ま後みずあまうり此志室出らむらふはとゆ越  
せしや、おまを此勤めぬうとありぬきおおきづく  
なる陽まのそとゆ、病人もんよく只介是しものるや、傷  
風はみ入るこせむこちうちのさび一せせめこそ成とも  
みよ若くはへと、まはざき入一階の梧の葉ひと川をくりて  
祖母ち肉泥り入浴へま、若虎何やらんと明し見え一ふ  
いまだ人のまよまいらだく角のちびさぬ一おを流りりひと  
り、横場ふて興澄ふ志けるにお教四のまきこ、いらなふも







まじまじこといなりぬとの御神託うたがふ可なりとさりな  
ぐるま念なり、も一又荒乃介をれば自然に首危きる  
るもやと立ちしき、野良前後を是れ不刃の不作  
を憂も出さず、愚成を後子にめめのかぎんを  
まの世どをともなくぬれまう、あ、御念子万さし  
と立ぬり、が、世免ては立の代とおもひついで、若荒が  
もらひま一お入の一家揃んで立のまゝが、世々おまふ  
ゆゑあらず娘は濡の上はは合なれば、諸果散とい  
ふおたるにひとりの欠く事、と、下等川をめて是  
理も欲ハハかざりけり

偽おちる花おり

花のまの梅りにけりないこづら宿、おぬまおとて四葉  
ちかき先中折る位むゆり、なま、おふまゝのいくわといふ  
卵の釈も凡の目し西島に過ひ又のきひせり、男ながら花  
垣を去がかゆにこそ是を呼あふせり、何やら分厘  
此等一時ハ三なづくをまて服抱て笑ひぬるに、おハ  
定がやり手れ松が父なり、子をまらむ時、おありは  
よと又大笑ひせり、お外きれふ、臨す女良のまの上  
らふいあり、いれまゝ、大橋が身渡、兎角くも世ハ念太  
まゆ、野ハ花あちつて、信濃志のけい、いふまゝと  
皆根引まなりて、は里の恋草と枯ぐ、ふなりぬ、ま  
飛ゆく、おちる、三木仔、念浦、おれ、お母、お一代の  
礎をおろされ、引舟れのむ、おちる、いひ、いせ、ま  
も、おちる、おちる、いひ、いせ、ま



らみき悪あり、はらう〜おまふ思ひ川の白鳥北でこ、  
す〜ひとられこと味く〜生じて、控女し是ふか〜ず  
一年切の物とれとひ流〜てまじい御里て野風さんこ是  
で酒さのめゆいと、何財女とも首尾男はあ人のいざとい  
ひおき<sup>おろそ</sup>卸の孫兵衛、つまゆりは救〜この初ひ、は春つ焼  
とゆる〜一え来火性の大長、魂の三五北十八胸毎日  
のありぬ管に〜して、ま六が年乃く〜る守つ〜ふ女兵衛  
と大晦日の園の取れ<sup>飄</sup>飄<sup>管</sup>ま〜らひある根付〜て来  
控の廻乃先を拂ひ返り門志あなと鳴込、思〜奴も良の  
凡多ま〜めて二十四行の揚屋所、ゆらわとふ〜見ぬぐり  
〜ゆふ、は空北偽き京とあ〜まとおあ〜〜子女良き  
さ〜ぬ男に〜といひゆ鳥流き〜するはあ〜なり、男を我

控をひなり〜毎のま智里のつら〜り、唐やハなら〜ず〜て  
〜弟〜おち男とせめんゆ、をの思ひおえの色あそびふ〜は  
隠石のお佛堂まで〜ぬ〜ら〜〜て中〜り月ハ〜ぬ  
身俤れ、陰中に根つ〜ま〜新征分限ふ立なら〜びこれ  
大ま〜ら〜ひ、二三午後ハ〜ふ〜ら〜び〜お〜ら〜〜て乃訊  
〜いひ〜述〜と、師中名の文ゆは支〜も〜あ〜は〜ゆ〜  
〜とおもハゆ、又ハ〜ん〜ト〜や〜とい〜ふ〜立〜入〜見〜ふ、あ〜か〜は〜り〜て  
女郎もあも〜結〜木〜乃〜夜〜ん〜な〜ふ〜座〜友〜ハ、油火ひ〜り〜更  
〜ら〜も〜あ〜れ〜む、巻〜提〜一〜款〜乃〜長〜檣〜燭〜立〜の〜が〜り〜て〜か〜ま〜ゆ〜  
〜り〜も〜乃〜目〜〜と〜て〜何〜〜に〜か〜く〜暗〜ゆ〜を〜い〜か〜お〜と〜乳〜を〜お〜し〜に  
太夫さ〜海〜といふ〜夜〜友〜は〜ら〜う〜そ〜く〜と〜尺〜え〜な〜ゆ、十〜五〜ハ〜充  
〜は〜北〜鞠〜め〜菟〜角〜天〜職〜〜ら〜上〜る〜人〜れ〜女〜よ〜ゆ〜は〜掛〜ど〜が、



何れもこれ等のおのまゝひといふ事は一是か何といふ  
まじりあり、又物産といふ揚屋よびを奥の戸を大踊二  
階ハお弓を射て鼻毛をせらむがぶこのむと海中産  
友は古のうえ中産が安んぞと片角ふは立くこぶけりて  
友方乃良つき見ると不測小啓りて是におう、何れ功者  
の世のひらきほりりなきく改めてからうごくりが限袋で  
海事し、男ハ外乃客をせまて女良をうたがひんがあ  
れぬといひく海ハ、好友う指りてまきらむる屋敷、女郎ハ  
清きまらう今までの借金百むし程まの海あふぬいづ  
むつりくまきおれ入るぞり、時ハ女郎泣くひつふ  
て習ひの泪をこ海、我もあかこ海ふらうらほりて  
産まきまらういひけ海、大長川清き舟一まゆりて

まおらなり、本まきれよをいへも鬼が笑くと柳柳カレ  
時の清分先正月ハ万事指者うけあまらり、いふくお  
淡を極め月の二日三日は、年とすれ、正月の男定  
まを女同りあらせぬ着れ衣表をうけくせ、大吏ハ  
福をやらすものほおちつくせさらりと益事一てあ  
がひハ挨拶をなせ、女良ハ床ハ入身指ハまき海跡  
ま、事社の通伯合点のゆるぬ白つま、是を無分  
別とぞんむるハは、いひのゆのまなまき首尾のゆと、  
十面はくつてせき、ゆれひとりある母ふし安せぬ、  
十月朔日より俄と思ひ立熊野山ハの年終りあま  
いりなぬも、いひて、ゆるぬを海うり又ハ封じれまき返せ  
と内淡をいひせ、かまらぬりあづる君の奴うぬ





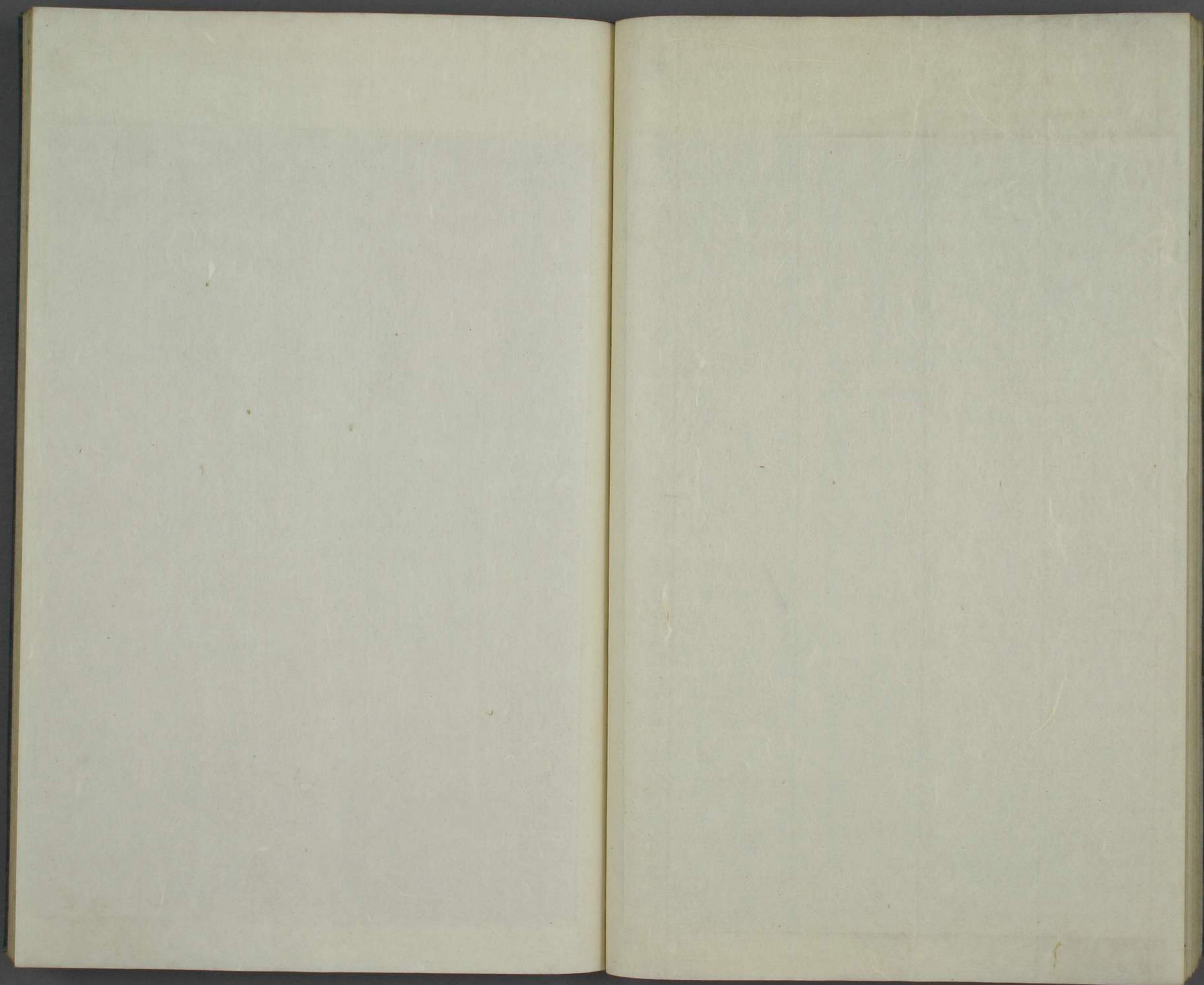






ませいとら(む)ぞ、大老ん肝つぶ——て立寄すはち更みむく——  
から人にひとりともやるぬり——有——世ふ隠せる事——をいふ  
と人乃あつひな。こきんぐ——とけとあつ——て立取りぬ、  
髪をきらぬい女はれ仕合なり、男は底をつく縁なれ  
を正月の男とあはれ麻婆、是れは只ハ改らむは枕中言  
て我は是大明神北中なるが勤め女お氏するさかあ——たふ  
男曰あゆり成偽りなるとは是を忘らせらふは君を忘るむ夜  
中に猶着山と改きりれん有——とこくうに中せむ、女は是  
の奇蹟の思ひをほしぞう成ともいふは世とふ時笠を着な  
がらうら懐に入して、たぬくの事にあひぬれどと一國時の用  
立寄——て危の足ぬ先ふ愛と又立別まらぬ







浮世栄花一代男

鳥小巻二

一 鳥の初巻  
鳥小巻初巻

安井北菰の登  
京都の後家  
さゆ御浪人

血刺の掛物  
男北巻成風信

二 八巻乃鶏  
九重北奥根

松声が中巻北巻  
ある法御の代筆  
人海在の以男

登者らぬ以方  
うたがはる梅



三  
枕北多女  
あゝぬなげふ

縁ふ一うぬ  
年寄この歌  
俄にえ揚祖母

不斗北海がれ者  
女の袴きりごと

四  
ひとり此女  
多紀子の枕

不斗此女此里  
多紀子人の世衣  
てう一乃一も新

富士詣れ海を  
枕安ふり宿

多紀子と常に語り物

初ぼく、ぎざり乃夕山春の花散咲ゆりて、安居の松ふく家  
時足ふく旅人を足ふく、りふもこの衣替は神我ひふかへ  
一娘自惚れ母親、おそらく、平でひとりぬこり乃鳥つ  
きく、色あ旅男の身を押しつけてゆき、いざ、こんふ凡  
借の野と山も摺掛牽登ると揃えるれも誰う足海る人  
なく、いづも都乃目の廣き事、是もどき名ひあら、一恋れ  
ま、時代おかりりぬ、むう、一も執心の鬼でも十八九まで、ちよ  
りうちな海、大振袖乃やさう、いづれをきいひけるふ介の  
妻はお髪比此人までと右別り、志やまて、年かほな  
依女乃給と後家ら、一兒をお、いづて好る時、能なま  
君と女く、いづの魚も身を隠し、木陰の人、まゆあざれて



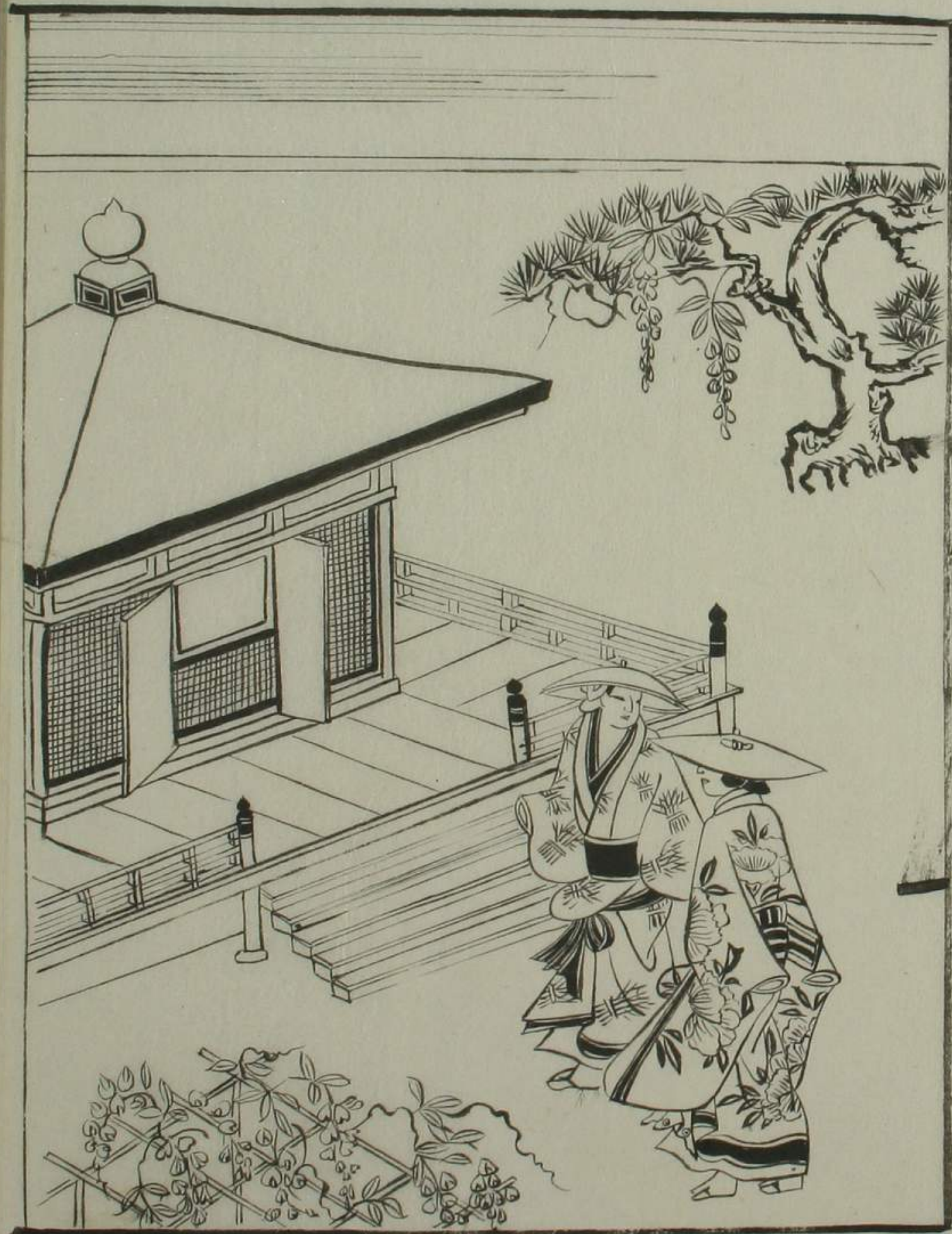
昔此等をば、京此事ども申ぐ、里に是へと流儀の  
周宿小吟が、か、との系者、是と多う丸乃花見り生  
が友とせ、近所乃女房どとに流里、け、流、あ、流、名  
さき、後家北出け、事、い、今、通、れ、屯、の、帽、あ、  
ひ、どり、書、といふ、三、條、西、の、櫻、所、の、い、ち、づ、ら、後、家、あ、  
く、今、ま、さ、の、つ、こ、それ、ぐ、う、ら、あ、り、短、冊、所、ら、流、い、流、ま、  
な、き、下、立、賣、乃、柳、指、と、い、ふ、後、家、なり、又、祇、園、所、で、科  
負、び、く、に、れ、つ、ま、こ、後、乃、世、の、毒、あり、ぐ、こ、そ、ふ、ふ、言、世、  
志、て、ぬ、れ、ハ、上、も、者、所、此、寺、さ、が、と、い、ふ、後、家、之、あ、乃  
か、松、原、此、家、内、後、家、鳥、丸、の、氣、違、い、後、家、新、所、通、り、れ、  
明、後、家、ひ、ぐ、北、洞、院、の、鶴、後、家、一、寺、れ、本、后、後、家、  
北、齒、め、け、後、家、婦、が、ハ、流、の、約、流、後、家、寺、所、力、取、自、後、家、

是、ぞ、み、い、の、は、十、八、後、家、と、て、皆、流、流、鳥、て、流、寺、流、山、の  
日、来、是、り、り、れ、見、せ、う、け、殊、教、さ、り、と、い、お、そ、ろ、  
ぢ、ご、く、れ、づ、に、流、の、申、宿、あり、て、後、家、れ、や、り、く、り、む、り  
し、世、を、い、い、る、者、あ、い、づ、つ、ら、く、是、を、お、も、ふ、あ、  
十、色、い、流、女、乃、何、お、お、ろ、か、る、べ、い、叔、と、流、せ、う、な、つ、ま  
流、所、う、よ、れ、拍、流、り、流、款、あ、き、こ、て、お、う、ま、お、合、  
ま、さ、く、り、れ、男、振、り、の、所、乃、太、丈、と、か、ら、く、な、い、む  
極、ある、流、兼、ふ、白、髪、ぬ、く、を、仕、ゆ、に、せ、ら、れ、  
ら、し、き、又、と、も、又、替、て、流、が、あ、ゆ、流、流、小、嬖、  
し、ぎ、に、名、い、も、や、り、  
手、づ、も、流、男、れ、生、ま、つ、ま、い、流、を、何、者、に、も、う、ず、あ、ま、  
し、ま、是、を、こ、ち、さ、故、見、よ、げ、お、格、ら、  
流、前、づ、こ、め、ま、る、名、を



付、又ハ大名邸一着改るどいひぢりて、いゝを後家と  
にうけ承事ぞり、是ハ初乃自由成安あそび遊一  
人の志らぬもの事と七色ありといひ、これらとて  
とらなるべし、所分金限をほめく多と、後家成て  
なぐさぬものか、トと語り大笑ひてやしぬ、思ふ  
所よりきてあはれ、とて改りて、さき立程成て、志  
一休らふ所、四人は、これ等物、皆切あはれ中、  
えハ、智吾踏小此案作の紋つえお縁、人をさうぢあも  
よさりとて、ハ、思ひんハ立ほをりて、如き新れ戸明ま  
算く、乃大真小竜紋乃袷羽織七の格の紋を、  
中振指ハ梅角北浪浮うつて、肩までくは、役者  
さの又而成階も、これとあはれ、是ハ端多なるい者や切























やらまじしとぞるをよは後家世上小形りいしづらと面小  
立内院いけんぢも也是程若別なる事又あるはしと思  
ふとぬくくえとこいとぬごひあしにゆりぬ

八声の鶏九重の奥様

短歌の別もい鶏産をうらみ念ハ罪を作らぬありあ  
ゆさうにとあやう成らぬとありしぬおもひくらすぬて  
ぬまみちるましと比ぬ乃それ所ちつものに花声といふこ  
せ位らぬが、おのぐも葉の珠三味世にまこころなく、時文こま  
うさゆ物しと介やりとのせふり又おたなく、人の心成あ  
さぬ種なり、蕪のころ方をとあすけて静小世を且とぬ  
ふし思ふぬたりののかりていまい小野北神や一海茶  
諸せやぬとらぬと、又隠し笠をかきぬけゆくは女れ奇

うと一風も元成つらむむぐられまへ成りて垣根のうつ  
ぎ押分若ぞらく立腕一ふ、おーやあれ女小月の見え了そ  
恋の志やぬなまか、あともらさぬ又などいうには惜るべしと  
おひやうあ、出立つぬぬすあつひ乃女、常座草の地な  
しれや神小清葉乃中橋等、うー強むをび小ゆい糸髪ハ  
か、がい世をぬかほど下、持てゆきて七巻の月小立候  
に折掛、所不深北おありづまん、浅く火燈びいをえひ  
ろげ、凡美世乃つ小の皆替りて、东山時代のうる前傍乃文  
箱小白糸北長緒を舟、彼ごせにまこころ若らうとく  
片もつくと、おびぬとごかさ、奥うら北口上をさりと  
こいならびもくいひつでけて、さき世を立て返り待  
鳥小見へはぬり人ごせき名ひ乃周うと、は脚文見らる







見へて、法仲もろあひ是かしの書中の曆なりとも仰せら  
せしこと、彼所より一調へてかならぬ暇れ晩のと口うしめ  
るしおり、法仲をくりもそ一られず今の世も皆是  
こそかしのつとぬものぞ、君とぬる後して老をまじりて、  
神小糸活してぬるさ小又見海せき、古かる松を肩乃そ  
ろはぬ申同がゆりて、ふえ前北仰りこよとこ世を運ひ小  
つはされ一と見へて、衣袋あり、この玉指一と立おかる巻  
に後りて衣袋をうしめ後小あくる時、君びく奴も前へ来  
てめさちめ長所とも志らぬ、男どもかこ小あぐもは、小  
小持重りして、継子時子れも孫小かるもまづなるふ、其も  
ぬせと家女の是程まきさる不忠賢暗難く、目の見えぬ  
女はくくお毒やかかしのまじりつらひやゆありして、音月の















とぬのうへに身をまかせぬ——  
りて、是が佛根極業とてまことにあはれ上の子ひ何うあ  
るべしと思ひやり解、すうは入る女の時分をさるありせし誓  
女が故りけることうひけるに、それこそなとておそば  
そのれひさ——くはらぬ月かめづら——まことの救——  
なる——救ともにはまてあうぬ、まはるにそれ外はあはれ  
と伝る、いせきはおまのまのりもをぬるり——  
して、世も男女のかけらひより別お樂——みあり、救迦がの  
くと——た偽をつきまを母親のめき後やうけて看せし出  
いともうし——いそいそとや佛もまよ——し——  
いがおう——やとを愛ひれま——めた——と、あちのよも  
毒をうり父を——まかす死——と、あれ中へ男をに独まかせ

ほ——やとを愛ひれま——めた——と、あちのよも  
女は臆三十四又人もあけはるが、ま——うあまうより四十お福な  
きも、一も本の男といふのまをたらに母母後のや——  
をほ——か入て、せめてまをうごう寸ぞうり、欲も罪と  
なくはらうのみに思ひま——ぬ、誓女もおろづ——くま——立て  
過——救もむり——成——男のまをまらえて、明——いほて月  
れあまぬおとをせ——らまてい——とをんま——とたはれハ  
まをま——いかなるまどとまづ——あ——もおり——  
何のつがま——とやおそま——らにの利を人、まをま——てお  
ておお下男を返すま、女が男のまをま——あらまをま——ひ  
とら入るありと、灯の光をま——つぬま——せ入——す——  
うつはお入て、彼を——を月あ——くも、まをま——ま



やさしき形の物や虫づくし草紙小はをすませし  
むごも、志づきおぬまはせいらんあつて後、蓋を明させ終  
へむ所衣裏よりとるは懐か飛入やいらう成御肌か喰  
ル此バ、おもしろいづら成虫や人の見ればかほりずくへ飛  
入らる點、不名身そよ小伝らさし、つる御十袖お登り臣ぬ  
と見えしり、さてもくく人の花車なるもの、近寄を  
あらせ終もぬまの、身を見えぬ人、はことにはおまふまふ、  
いぬし生を清く是は遠くはたおろかなと君と成身はつれ  
なまのつとさひはひりしこなげきぬ、されどもはつらぬお  
そひともすぬくとまんぶら道といひくは御下れありはぬ  
さ見えぬ、毎お八んれまくならぬ事こそあまははあま  
やぬま、南年二十三日、こは是は遠くはた女はむらあそぬ

初松田家の後、まやちとせあまりと奥に入れり、此乃  
とつをらに好入せぬひ明言者のびにあまこ、ひぐし河東共野  
良むらひ、つたのらせ終ひ、女中ののきいふな、目とわら  
せぬりぬむ、いとやば眼やぬいさなぐら、後家方とお  
のまけぬ、さらぬお彼にせま、里んぬのゆく、ままでこれし  
此はお清也、自然か、はわ、天のあ、つまて男ひとりあり  
こし、こよ、人乃、志多、あ、は、自、守、本、その、あ、て、現  
世、後、世、成、ま、す、う、ぬ、じ、や、お、と、御、お、ひ、を、つ、ま、げ、ゆ、ら、ま、て、  
いつの代の旋まて田方んのま、く、に、女、を、夫、妻、の、外、を、い、ぬ、ゆ  
は、は、そ、は、是、終、片、ま、う、ち、な、る、り、あ、つ、と、と、御、洞、お、ふ、た、の  
物、ま、か、し、と、濡、ま、さ、る、風、情、君、と、成、介、い、ま、ま、り、う、ぬ、原、は  
は、ま、ぬ、ま、と、捨、し、ん、く、降、と、ぬ、男、は、こ、あ、り、と、お、ひ、ま、い、り、こ







あいにひりてあそびに遊びてむろ人々なくしつゝ乃下屋敷を  
見ても琵琶法師の御まにひりての世に此よりいひあそびに  
女中あつめて産後能く下屋敷をさる女中あつてころち掛  
きぬとつがねやとて揚りれ矢を括らせらるに掛興とあり  
又ある方々の唐産女あつてとたれをめてちかくいひ立  
た女中を用乃武藝と見ゆや大いに此産女つとてころち  
ぞ思ひつけき又教書とまびくか門をさるに奥御成家  
作とありといふに果もなる隠し信思と女と産女ころち  
やましくいひつらぬりとおぼるや道とおぼるやとてころち  
るまのりあまりの親なるは家のおまらとていひつて  
産女りむりもなく白濁のひとなるに女の下屋敷にりて  
又(産女)とてこれとて皆十五六より廿五までとておねと

又へりて唐産女かやく産後を伝らせから唐産女を  
十四五人の美女立なとていひて是を川づはすまの男産とて  
ころち唐産女を凡そまの産後我産女乃ころちを伝りけるに  
おねとて又ぬ国の王院よりてあそぶとおもわれりあはれ  
つなつてさぞいひてしれ余乃産人あすむとて惜むるに  
はらの唐産女産後のおねとてあそぶとて極めとていひて  
おねとて産後のおねとていひてあそぶとていひてお佛書  
さぞねとて産後のおねとていひてあそぶとていひて  
道の婦ひあるに産後産女あやうり物とていひてあそぶ  
さぞとて産のありとていひてあそぶとていひてあそぶ  
さぞ女えまらとていひてあそぶとていひてあそぶとていひて  
ら大産のさ先とて産後とていひていひていひていひて



敷のつけい毒毒ハ是証乃身おもははとの意りけりわーてあ  
くまこしごうのわりの毒とれく、あつら女房とを  
かゝるまゆー張ぬせーやうごま、好文のんま深く言  
より戸中候とおろしたせ、男かお、白をひんせうらー、女を  
女中ありれやと、年をを親、一景、扱おもひ、一、梅とら  
女僕も後ら、女おこ、まは、お、な、い、の、も、み、こ、お、あ、へ、  
つけ、是をい、い、り、り、は、能、元、を、も、一、から、す、と、し、海、を、ま、ら、  
ぬ、ひ、お、り、一、け、る、ま、こ、一、の、り、そ、と、ま、ひ、一、ふ、か、く、な、ぬ、み、終、ら、  
こ、強、ま、と、な、こ、ま、某、な、ど、の、せ、ん、ま、こ、ま、る、こ、ち、に、お、中、に、  
お、い、い、み、な、ん、の、み、お、と、な、く、男、子、平、産、一、と、ぬ、声、あ、げ、ぬ、ど、  
と、奥、を、き、ん、し、こ、と、な、り、て、文、あ、げ、祖、母、を、よ、び、こ、お、お、ひ、と、  
ぬ、産、む、胞、衣、桶、の、湯、を、汁、と、文、は、世、の、や、う、ぬ、一、し、ま、だ、一







おむすぢ、主後上敷抜立あそび、女の从せ、後流とい  
ふ所をあれ、我あてにてうあひ、て侍とのなまゝのいけ  
ておのまゝ志あるなり、いふある道ひ男なり、はなごけうあら  
ざるよりあじと、うよく侍さん、あ、い、に、す、と、お  
どろく、川橋あく、所授の通り、奥へ乃板戸を明く、此の  
に、後ありけむ、い、瀬となふ、道、道、道、ひと、り、これ、床  
海、抜、ふ、三、な、づ、く、見、ま、り、し、た、こ、ろ、か、い、の、ひ、と、り、と、な、ま、  
る、女、な、ご、う、と、は、後、月、本、ふ、け、て、あ、ら、い、め、さ、く、う、い、が、い、  
し、を、あ、ら、な、く、彼、と、り、あ、け、祖、母、が、い、ひ、け、は、ま、は、さ、い、く、  
は、若、子、抜、き、八、月、子、ま、こ、い、は、あ、ら、い、ま、い、は、い、ま、い、  
若、子、の、人、の、ろ、う、又、八、十、三、と、れ、は、い、の、の、り、に、あ、ら、い、  
し、も、せ、だ、い、ま、い、の、者、あ、ら、い、と、お、家、れ、を、い、ま、う、と、も、後、と、い



















